

發達せざる心の偉大さ

— 某講演會における講話の一節 —

文學士 菅 原 教 造 述

原始人の藝術は、その洞窟の壁にかゝれた繪にしても、小石や骨片にきざまれた彫刻にしても、單に、慰みのためといふのでなく、彼等の内の生活のやみがたい慾求から迸り出た表現であつて、即ちその慾求とは、實に、食慾、性慾の二つがその主なるものであつた。しかも、彼等のこの慾求の源泉となつたものは、彼等の原始的な宗教生活であつて、かの今から二萬五千年前の原始人によつて畫かれたと稱せられる、スペインのアルタミラ (Altamira) 洞窟の壁にある野牛バイソンの繪のごときはこの動物が食用に供せられるために多く畫かれ、又、獵して多く獲物があるようにこの呪禁マジックの意味でも畫かれたのであつた。石器時代の女の胸像や胴體トコにしても、性的の慾求をあらはして居ると見られるものが多いのである。彼等の生活を考へて見ると、現代のやうに、宗教、藝術、科學の三つにわかれる以前の世界、即ち不分化時代

ともいふべき世界に生きて居つた。彼等の心を支配して居つたものは、トーテミズム (Totemism) でありタブー (Taboo) であつた。トーテミズムと云ふのは、原始人がその種族の有する表號を崇拜すること、その表號は動物とか樹木とかいろ／＼あつて、例へば、熊族といへばその種族の人々は熊をおかすべからざる神聖なるものとして之を禮拜するのである。タブーとは神聖にして犯すべからざるもの汚穢にして近づくとべからざるものに對する、禁忌を意味する。例へばある一定の時になれば男子は婦人に近づくをゆるされないものでその時期にある婦人はタブーである。道徳も宗教も、かくのごとく、トーテミズムにより、タブーによつて嚴肅にたもたれて居つたのである。男女の貞操といふことも今の人の考へるものは餘程面目を異にして居て、理屈ではなしに、彼等の純真な心から、たゞ感じ、たゞおかすべからざる

ものとして之を守つたのであつた。かくてこの時代は、所謂、神人合一ともいふべき時代で、神話意識の中に皆が生きて居たのである。彼等は、官能の世界に強烈に生きた。そしてそれに應じて美しいと感じ、みにくいと感じ、壯嚴と感じたその感じそのままの——即ち情操の世界——中にちつと浸つて生きて居つたのである。しかもその官能なり情操なりの潤澤豊麗なものを、色なり形なり音なり言葉なりの方便によつてあらはして來た。これが彼等の藝術である。そは、彼等の人間らしい心からおさへきれずしてあらはれ出たもので、藝術は、官能なり情操なりの表現即ち一つの記號であり象徴であつた。

宗教と藝術と科學との三つにわかれるまへの彼等の生活は實に原型(プロトタイプ)としての生活をつづけてゐたので、こゝに我々現代人のように知識に中毒させられたものには思ひもおよばない眞實な世界がある。我々はこの我等の故郷にかへつて、その如何に感じ如何にあらはしたかを謙遜の心でみつめてこそ初めて人類の故郷即ち人間そのものがわかるのである。

翻つて子供の生活を見ると、彼等も亦この原型の

まゝに生きてゐる。しかし原始人と子供とを比較してみると、必ずしも同じ程度の強烈な慾求をもつて現代の子供は生きてゐない。食慾といふことはとにかく、性慾とか宗教味といふような點に於ては、(學者によつては随分早くから性的慾求のあるように説く人もあるけれども)全然原始人と同じとはいはれない、たゞ子供は實に原始人におけるがごとく眞實に生きてゐる。不分化の状態に生きてゐる。彼等の眼に映ずる自然は實に彼等にとつて、生命のある、彼等とゞもに生き、ともにかたる仲間である。子供の世界は小さい、やさしい、やはらかい世界、原始人の世界は大きな、氣味のわるい壯嚴な世界であつて、しかもその發達せざる心の持主としての彼等子供は理智に生くる我々大人よりも、如何に正直に生きてゐることであらうか。發達こそしていないであらうが、自己に眞實に生きる彼等のまへにたつ時に、知識といふ利巧らしい名目にまどはされてゐる我々自身を恥ぢなければならぬ。こゝまで味はうことが出来なければ、我々は、決して子供をよく導いて行くことが出来ない。しかも我々の心持の中には、進化論的に云へば子供を足の下にうごめくものと

し、支配したい氣持があるけれども、人類の故郷から發した叫びから云へば、吾々は、この小さい子供の爲めに引上げられて行くように感ぜられる。こゝに一つの矛盾があり撞著がある。しかし、このなやみこそ、子供を相手とする人達の當然うべきなやみである。これなくして、どうして我々は子供の相手となり得よう。

吾々大人はどうも甚だ正直でない。心にひらめくさま／＼のこゝをそのまゝちつと見つめることをしないで、すぐに、よいとかわるいと思つておさへたり打消したりしようとおせる。しかし、もし虚心平氣に我が心におこるさま／＼の心持をうけるとすれば、美しきにせよみにくきにせよ、善きにせよ、惡しきにせよ、そは何等か當然おこるべき權利をもつて我がうちにおこつて來た心持に相違ない。先づ取りあへずその心持に生きる、しかして、もし、それがいけないことであるとすれば、何故さういふことが我が心におこつたかをたづねたならよいではないか。その原因は何處にあるか、或は遠く我々の故郷たる原始人にさかのぼつて其處にその源を發しておるかもわからない。正直に生きる、我が心をいつは

らない、この心はやがて子供の眞實にふれて、彼等によつて教へられることで、もし我々が子供は發達せざるの故をもつてだめなものを見くびるようなことをするならば、それは我自分を、また人間そのものをみくびることゝなるであらう。

子供の世界は、大人の世界と全く別のものではない、今假りに凸レンズを通じて事物を見る場合にたとへて考へて見れば大人の世界を實物とすれば、子供の世界はレンズを通じてむすばれた像である。實物でない實生活でないといふけれども、その中にえがき出される像は大人の世界にあるものゝ反映である。みにくいものがあらうと美しいものがあらうと、それは人間として有するものゝ事實である。子供の生活を虚心平氣にみつめて、「困るぢやないかこんな生きかたをしては」と叱つてみたところが、それが大人の世界にもあるものならば、どうして我々は彼等をさばくことが出來ようか。我々は大人なるが故に、發達したるが故に、子供より偉大であるといふことがどうして出來ようか、人間が人間としての偉大は眞實に生きるといふことである。そしてまた眞實に生きるものゝまへに、不正直な我が心の姿をはづる

だけの謙遜な心がなければならぬ。

人間が人間としての眞實の生活には靈的方面と肉
的方面との二つがある。前にも述べたように原型と
しての生活は不分化の生活であつたが、その後にな
つて、宗教と藝術と科學とにわかれた。宗教の世界
ではすべてを靈化した。即ちあらゆるものを、物と
してみないでその中に靈ありとするので、これが發
展して來れば、あらゆるものを靈の權化とする、そ
して物質の世界を超越した世界を考へる。それ故に
この靈化の經驗といふものは、可成りに主觀的なも
のとなつてしまふ。また科學の世界では一々の物質
をさらへて、詮議するのであつて、例へばエテルギー
といふものはどう、電氣の本質は如何と、自然界の
物質を忠實に究めて行くのであつて、即ち靈化に對
して物化する世界で、これはまた客觀的といへよう。
叔こゝに靈化と物化の二つの世界に於て我々人間は
どう生きるかといふに、靈化の世界ではあまりに高
尙すぎ抽象すぎて、到底この肉體をこなへたものが
そこに徹底して生きるといふことが出來ない。さり
とて、すべてを物化してしまつては、また、味がな
さすぎる。そこでこの二つの世界をむすびつける世

界が藝術の世界となる。それ故藝術の世界は靈化、
物化に對して人化する世界といへよう。そして、ま
た、主觀と客觀との兩方面を結びつける合一的の世
界である。一面に神の性を、一面に動物の性をこな
へてゐる我々人間は、この合一的の世界に於てこそ、
初めて、おちつくことが出来るのである。神といひ
佛といつても、それが、我々の有する、なやみも、
もだえも一向に知らないたゞ神聖なものであるなら
ばすがる術も、すくはれたいのぞみも如何ともする
ことが出來ない。どんな立派な教にしても、これを
とくものに肉的のつよさ厚さがなければ、その教は
決して人をひきつけるだけのものにはならない。

かの中世紀に、苦受マリア(マテール・ドロサ)が
多くの處女たちの祈願の的となつたといふのも、こ
れは人間としてさまざまのなやみをもつ處女たちに
とつては、キリストはあまりに高く、あまりにおご
そかで、近づきがたく思はれたので、それよりもキ
リストを生み、そだて、しかも彼を十字架のもとに
おこつた聖母マリアの人間としてのなやみを經驗し
たその愛の腕にすがりつき、それによつてすくはれ
たいといふ、即ち人間味のゆたかなるねがひの心持

である。一つの花を見て美しいといふ。その心は、單に花を花として物質的に見るのでなしに、それに生命を與へるのである。乙女が花の一片を摘んで之に頬すりしたり、接吻したり、さては、しほれた一片を詩集の間にはさみこむその心は、花に自分の心を投げかけて、それを人化したのである。

このような意味で、藝術の世界こそ、我々が人間味をゆたかに味はつて生きて行くことが出来る世界である。この世界は知る世界でなくて感ずる世界である、したがつて、各々の人が自分の内面生活の深さによつて、その見る世界も、うけ入れるものもことなつて來る。

さて、この見地から子供の生活、ことにその畫く繪といふものを見ると我々は原始人の繪にあるブリミティブな、力づよい感を禁じ得ない。子供は外界の事物をそのまゝに見るといふことはしないで、實に大膽に自分自身をそちらになげかけて行く。それ故、彼等のゑがく一本の木も、一つの山も、それは彼等自身を其處に表現するのである。そこで子供のかく繪には、せまつてくるようなつよさがある。單なる外界の模寫でなしにそこに生命がうごいてゐる。

る。彼等は知識でかくのでなしに感じでかく。それを、我々大人はともすれば、理屈にこりかたまつた眼でながめるので、甚だしきは自己にせまつて來るその子供自身の表現にさへ感ずることもしないに、その偉大に驚くこともしないで、幼稚だとか、かはいととかいつてのけてしまふ。

純真な素朴なしかして力づよい感じそのものに生きることを忘れた我々大人は、此處へ來ると、子供のまへにぬかづきたい氣がする。靈的に生きようとあせつてもがく人々のあはれな姿や、物的に萬物を解釋しようとりきんで、しかも全く、靈的方面をすてられもせぬ人々のみにくい姿をあはれむように、子供等は、思ふまゝに藝術の世界に浸つてゐる。眞實に自己に生き、自己をあらゆるもの、中に表現せざればやまないあの力づよさに生きる子供の相手とならうとするには、先づ自己に眞實に正直に生き、謙遜な心で子供の偉大に驚くものでなければならぬ。

かの有名な佛の畫家ゴッガンがわざ／＼亞米利加のある島へ行つて、野蠻人の生活を研究して如何にかれらが大胆に卒直に自己を表現するかに驚きそれによつて、彼自身の畫風も一新生面をひらき、ひいて近代の畫界に影響を與へたといふことは、畢竟以上のべたような心持と同じで、如何に我々の生活が知識にわづらはされてゐるかの反證にもなるのである。

子供を教へるといふ言葉はこの意味からすればまことに僭越なこととて、教へるどころか、我々の方がかへつてその偉さに驚嘆しつつ、我を恥ぢるので、ただ我々の心持ちは、彼等を善導したのであるけれども、それが出来なければ、せめて、もつてゐるその貴い生活をそこなはないやうにと祈りたい。これが彼等に對して我々のなし得るせめてものがひであらればならぬ

(文貴筆記者)